

地下の正倉院展—平城宮木簡の世界II 宮廷の生活

展示期間

- I 天皇の食膳 二〇〇七年一〇月三日(火)―十一月 四日(日)
- II 宮廷の生活 十一月 六日(火)―十一月十八日(日)
- III 木簡の諸相 十一月二十日(火)―十二月 二日(日)
- IV 宮城の守り 十二月 四日(火)―十二月十六日(日)

a 「正倉院宝物」の落とし物

1・2 香炉と香入れの付札

御殿内火爐一口 長さ一六二mm・幅三三mm・厚さ三mm ○三二型式
(四七九号木簡)

搗香櫃

長さ四一mm・幅二四mm・厚さ四mm ○二二型式
(四六五号木簡)

「御殿」は聖武天皇の日常起居した内裏の正殿。「火爐」は火鉢の意味だが、お香の容器の付札と一緒に見つかっているから、香炉と考えたい。「一口」は一つ。

「搗香」は砕いて細かくしたお香のこと。「櫃」はそれを入れる容器。木簡の大きさと両角を切り落とす端正なつくりからみて、かなり小型の精巧な容器とみられる。

これらは聖武愛用の恐らく対になる品物の付札で、あるいは、天平一二年(七四〇)から一七年(七四五)にかけての恭仁・紫香楽・難波・平城間の聖武の移動に伴って運搬した際の付札かも知れない。正倉院に献納されていても不思議ではない、文字通り「地下の正倉院」の遺物。

b 女官の横顔

3 女官にこはんと塩を支給した記録

(一九六号木簡)

飯五斗 塩一百顆 用物 真浜女 板野

長さ(二一九)mm・幅一八mm・厚さ四mm ○八一型式

「飯五斗」と「塩一百顆」を女官の「真浜女」に支給したことが記される。「飯五斗」は今の二斗、約三〇キログラム。「顆」は片塩(堅塩)の単位。一顆は五合、一升五合、三升などの例がある。五合とみても、飯に比べて過大な量で、米の支給量には見合わない。「板野」は、阿波国板野郡出身の采女、板野命婦(粟 凡 直若子)のことか。真浜女の上司であろう。

4 「真浜女」の見える削屑

(二七三号木簡)

真浜女

○九一型式

3の木簡に見える「真浜女」と同一人だろう。3と同じようなタイプの木簡を削ったものか。彼女がSK八二〇の木簡を使用した役所に勤務していたことはまず間違いないだろう。

5・6 女官の口頭命令による事務処理の記録

命婦宣進黄

○九一型式 (八四号木簡)

「命婦宣」は、某女官の口頭命令。その命令により「黄」を進上したことを記録した部分の削屑。「命婦」の前には命婦の名前が書かれていたのであろう。

〔婦カ〕

□□宣

〔田部カ〕

□□□□□□□□

○九一型式 (八三号木簡)

某命婦宣により。何らかの事務処理を行ったことを記録した部分とみられる削屑。

7 緑の縫衣の櫃の付札

(四八〇号木簡)

緑縫衣入櫃一合

長さ一五二mm・幅二二mm・厚さ七mm ○三二型式

「緑」色に染めた「縫衣」を収納する櫃の付札。「縫衣」は、袖の下から両腋を縫い合わせた服。「合」はここでは櫃の単位。

木簡をよむ⑥

木簡リサイクルのゴミー削屑

削屑とは、木簡を削った時に生まれるかみかみ状の小さい木簡です。小刀を消しゴム替わりに使った昔の役人たちの「消しカス」ともいわれますが、用済みの木簡を再利用するためにまとめて削る木簡リサイクルのゴミとみた方がよさそうです。一つずつのもつ情報は断片的ながら、近くの役所で行われた日常業務に密着した大切な資料です。ただ、たいへん壊れやすく、取り扱いの難しい遺物でもあります。

8 天皇や女官の衣服の縫製記録?

(二〇〇号十二〇一号木簡)

〔練カ〕

(表)二蒲萄染

御被一 進浅田

(裏)

十六日敷御被三

十七日練御被三 十八日 橡大御服カ

□

□

御 橡カ

長さ三三〇mm・幅二二四mm・厚さ五mm ○八一型式

日付ごとに衣服の種類と数量を書き上げた木簡。「御被」は覆衣。「蒲萄染」は、濃い赤色。「橡」染は黄褐色。「練」は練絹のこと。「大御服」は天皇の服を指すか。天皇や女官の服の縫製記録かも知れない。縦割きにして捨てられたものがつながることがわかった。

木簡をよむ⑦

木簡の素材

木簡に使用された材にはヒノキが多く全体の七、八割、ついでスギが一、二割で、この二種類で大半を占めます。どうしてでしょうか？ ヒノキもスギも都の建築部材として多用された樹種です。恐らく、建設工事で用いる木材の端材が、最も一般的な木簡用の材の供給源だったのでしよう。都に送られる租税の荷札も、北陸や山陰の諸国(特に隠岐・越前・能登)でスギ材が多いという傾向はありますが、この二種類が大部分であるのは変わりありません。また、九州諸国から送られる木簡には広葉樹が多いという顕著な特徴が見られますが、地元で見つかる木簡はヒノキやスギだといえます。マツ材が多い韓国の木簡とは対照的です。

C 内裏を支える木簡

9 図書寮の呼び出し状

(五六号木簡)

(表)符三野部石嶋等
 右為打 勅旨紙召宜知此状以
 卯時以前進 寮庭
 (今カ) (日カ) (上カ)

(裏)莫為怠遅符到奉行
 大属錦部連真道

長さ一七九mm・幅(三二)mm・厚さ六mm ○一型式
 [月] 日卯時カ

「勅旨紙」(天皇が使用する紙、または天皇の命令を書く紙)を「打」つ(墨ののりをよくするために紙の表面を叩いて平滑にする作業)ために、「三野部石嶋」を図書寮に呼び出す木簡。「卯時以前」(朝六時まで)に「寮庭」「寮」はこの木簡の差し出し元で、図書寮であろう。「庭」は役所の意に「進上」せよとある。翌日の業務に備えた勤務の指示であろう。

10 ひょうたんの購入記録

(二二二号木簡)

(表)瓢七十二口 大廿口直銭百六十文各充八文
 小五十二口直銭百五十六文各充三文
 (裏)合参伯耆拾陸文

長さ二三四mm・幅四六mm・厚さ一〇mm ○一型式

大小のひょうたん(ひさご)「七十二口」「(口)はひょうたんの単位。「個」の意味)を購入した記録。一文字目の草冠に「瓢」は、「瓢」の異体字。「大」ひょうたんは一つあたり「八文」、二

十口で「直銭」(値段)は「百六十文」。小ひょうたんは一つあたり「三文」、五十二口で「直銭」は「百五十六文」。合計「参伯耆拾陸文」。ひょうたんは、宮を守る兵士の水筒として用いたものか。

11 西市での物品調達用の銭の付札

(四八九号木簡)

西市司交易銭

長さ一三四mm・幅一八mm・厚さ三mm ○三二型式

「西市司」は平城京右京八条二坊にあった公設市場西市を管理する、右京職管轄下の役所。左京八条三坊に置かれた東市とともに、平城宮の宮殿や役所で使用する物品の多くはここで調達された。これはそこでの「交易」(物品購入)用の「銭」(和同開珎)の付札。銭を孔に紐を通して束ね木簡を括り付けた。

12 薫の数量を検査した記録

(四三号木簡)

〔九カ〕

又乱六束

(表)九月□日檢校薫式伯陸拾伍圍
 (裏)中務少丞池田足繼

長さ三五二mm・幅四二mm・厚さ六mm ○一型式

木簡をよむ 行ったり来たりする木簡

現代ならば手紙は受け取った側で保管したり捨てたりするのが普通。けれど古代の木簡による呼び出しや物品の請求の場合、木簡が差し出し元に戻って廃棄されることも多くあります。これは本人証明や調達物の確認のために、木簡を持って行くからで、丈夫な木ならではの使い方といえます。木簡の発見地が木簡の宛先とは限らないのです。

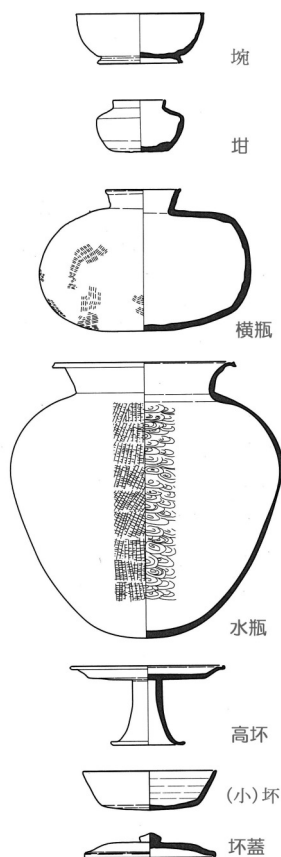
「中務少丞」(中務省の第三等官)が、藁の数量を「檢校」(檢査)して、「式伯陸拾伍圍」と「乱六束」あることを確認した記録。「圍」(圀)は藁の単位。「乱」が一圍に満たない半端分とみられるので、一圍 $\frac{1}{2}$ 束か。中務省管下の図書寮や縫殿寮で、造紙原料や藁製品の素材として用いるためのものか。

(四七八号木簡)

碗廿七口 埴十七口 与区閑四口 加比三口
水瓶二口 高坏五口 小坏三口 坏蓋九口

長さ二二五mm・幅二七mm・厚さ三mm ○三二型式

「碗」、「埴」、「与区閑」(横瓶)、「加比」(不詳)、「水瓶」、「高坏」、「小坏」、「坏蓋」の八種類、計七〇点の土器の内訳を記す。土器の進上または保管の際の付札か。



d くじ引き札をつくる

14~21 まとめて捨てられた一セットのくじ引き札

中緑系 長さ六〇mm・幅一八mm・厚さ三mm ○二二型式(四九八号木簡)

黒緑系 長さ六四mm・幅一八mm・厚さ三mm ○二二型式(四九九号木簡)

浅緑系 長さ六八mm・幅一九mm・厚さ四mm ○二二型式(五〇〇号木簡)

縹生染 長さ五五mm・幅一八mm・厚さ三mm ○二二型式(五〇九号木簡)

中緑生染 長さ五五mm・幅二二mm・厚さ二mm ○二二型式(五一〇号木簡)

浅緑絶 長さ五四mm・幅一七mm・厚さ三mm ○二二型式(五一二号木簡)

黒緑東絶 長さ六七mm・幅一七mm・厚さ三mm ○二二型式(五一六号木簡)

取色 長さ七〇mm・幅一八mm・厚さ三mm ○二二型式(五二〇号木簡)

これらの小さい木簡は、色名+製品名(糸、綾、絶、絹、生染など)の記載からなる。これまでは繊維製品のラベルと考えられてきた。しかし、木切れを粗く切断してまとめて作られたこれらの木簡の記載には、同じ色と製品の組み合わせが一つもない。なににみんな同じ表情をしていることには何か意味がありそうだな。ひとまとめにして使われたとみた方がよいのでは？

決め手になったのは「取色」と書かれた一点。「色」と製品(を取る)とは……、そう、くじ引き札ではなかるうか。

青や緑が多いのは下級官人の制服の色に通じるが、絹や綾など高級品も含まれる。中には「御服絹」などというのもあり、天皇用の服地の端布かも知れない。内裏を守る兵士や下級官人たちの宴会の余興か、はたまた女官たちのお遊びか。天平人の息吹を感じさせる木簡。

木簡をよむ

くじ引き札の作り方

刃物を入れて折っただけ、ささくれを残したままの粗い加工が、これらの木簡の製作方法を復元し、一括して作られたくじ引き札と考える大きな手がかりとなりました。どの面に文字を書くかも札を取る手に任せよう、つなげてみると文字のある面はまちまち。一定量の札をまとめて作り、同じ組み合わせができないように注意しながら、一人で一氣に書いていったらしいことがわかります。